

平成 22 年 4 月 19 日現在

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2007～2011

課題番号：19720155

研究課題名（和文） 現代アルメニア・ナショナリティの形成過程

研究課題名（英文） How has the modern Armenian nationalism been formed?

研究代表者

吉村 貴之（YOSHIMURA TAKAYUKI）

東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・研究員

研究者番号：40401434

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・史学一般

キーワード：世界史、ナショナリズム論

1. 研究計画の概要

(1) 全世界に広がるアルメニア人社会のナショナリティは、1920年代にその原形を表出した。ただし、在外アルメニア人社会ではホスト国での同化と異化の間を振幅する過程を経ることになる。その際、ソヴィエト・アルメニアの在外社会に対する宣伝や動員が大きな役割を果たしている点を明らかにする。

(2) 一方、ソヴィエト・アルメニアそのものも、ソ連体制内での「民族共和国」という擬似国民国家を形成していたために、ソ連政府の政策によってその性格は変貌し続けた。特に第二次大戦直後の「祖国帰還運動」を通して、本国と在外アルメニア人コミュニティとのアイデンティティにまつわる相互交流や軋轢を明らかにする。

2. 研究の進捗状況

(1) ソヴィエト・アルメニアの宣伝や在外協力者の動員に関しては、アルメニア本国内で研究や、行政文書並びに定期刊行物などの史料が比較的揃っているため、順調に研究が進んでいる。

(2) 一方、在外アルメニア人コミュニティの

史料収集は、史料が散在しているために、多少難航していたが、定期刊行物はレバノンによく保存されていることが分かってからは、多少作業効率が上がってきた。

3. 現在までの達成度

① 当初の計画より、若干の遅れが出ている。（理由）最大の誤算は、反ソ活動を行ったアルメニア系の民族政党が、2009年から順次党史料を公開する事業が延期されてしまったため、民族政党の活動の詳細が分からないままとなってしまったことである。

4. 今後の研究の推進方策

(1) 戦間期、戦後のアルメニア系民族政党とアルメニア共産党との関係を細かく検証する路線は将来的な課題とし、まずは民族政党系の定期刊行物に表れた民族政党の「祖国帰還運動」に対する姿勢を明らかにすることに焦点を絞る。

(2) それを踏まえたうえで、「祖国帰還運動」によって、国外の同胞との接触が増えた結果、本国人の共産主義と民族主義のバランスの変化がどのように起こったのかを、冷戦が確立していく国際環境と絡めながら論証する。

5. 代表的な研究成果

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計2件）

① 吉村貴之、「パリ講和会議とアルメニア問題」、『現代史研究』、54、35-51頁、2008、査読あり

② 吉村貴之、「アルメニア人虐殺をめぐる国

際政治～虐殺承認問題とナゴルノ・カラバフ紛争～」、『民族紛争の背景に関する地政学的研究』平成 20 年度報告書、209—225 頁、2009、査読あり

〔学会発表〕（計 5 件）

- ① 吉村貴之、「アルメニアとトルコの『歴史的和解』はなるか」、国立民族学博物館共同研究「ポスト社会主義以降の社会変容—比較民族史的研究」（2009 年 11 月 28 日、大阪、国立民族学博物館）
- ② 吉村貴之、「戦間期ソヴィエト・アルメニアの故郷宣伝」、「黒海地域の国際関係」シンポジウム（2009 年 10 月 1 日、トルコ、ボアジチ大学）
- ③ 吉村貴之、「アルメニア人虐殺」、日本平和学会 2008 年度秋季研究集会（2008 年 11 月 23 日、愛知、愛知学院大学）
- ④ 吉村貴之、「アルメニア人虐殺をめぐる国際政治」、大阪大学世界言語研究センター「民族紛争の背景に関する地政学的研究」複合領域第 1 回研究会（2008 年 6 月 14 日、大阪、千里朝日阪急ビル）
- ⑤ 吉村貴之、「祖国の創出：第一次世界大戦後の現代アルメニア・ナショナリティ」、21 世紀 COE プログラム「スラブ・ユーラシア学の構築」総括シンポジウム「スラブ・ユーラシア学の幕開け」（2008 年 1 月 26 日、東京、日本教育会館）

〔図書〕（計 2 件）

- ① 吉村貴之、『アルメニア近現代史』、東洋書店、2009、査読あり
- ② 吉村貴之、「故郷を創る～アルメニア近代史に見るナショナリズムとディアスポラ」、臼杵陽監修、赤尾光春・早尾貴紀共編『ディアスポラから世界を読む』（明石書店）、80—113 頁、2009、査読あり